

ベトナムにおける日本文学の重訳
-歴史的背景と異文化要素の翻訳-

Nguyen Thanh Tam

(神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程)

The inseparable relationship between relay translation and one country's translation history has rekindled academic interest in relay translation since the last-half of the 1990s. This article focuses on the phenomenon of relay translation (or Indirect Translation) of Japanese literature in Vietnam. Japanese literary translation in Vietnam, which has been affected by political and cultural events, is an excellent example of how relay translation can be introduced in a society and how it can document the society's change over time. First, the article will confirm the role of Japanese literature in the literary translation system in Vietnam. Then, it will summarize the events in translation of Japanese literature during the period of 1945-2001. Lastly, in order to find out the features as well as the problems that occur in relay translation, the article will also analyze the translations of literary texts.

1. はじめに

「重訳」あるいは間接翻訳 Indirect translation (ITr)とは、翻訳されたテキストのさらに別の言語への翻訳であると定義されている(St.André, 2009)。学術的に無視されてきたが、近年重訳は注目を浴びる領域になりつつある。異文化を翻訳するにあたっての重訳の役割と本質を探るため、Tourey (1995), Kittel and Frank (1991), Dollerup (2000), Ringmar (2007), Delabastita (2009), Koskinen and Paloposki (2010)などの実質的な研究も出てきている。また、2013年8月末に行われたヨーロッパ翻訳研究学会(European Society for Translation Studies)では、“Indirect Translation: exploratory panel on the state-of-the-art and future research avenues”¹(間接翻訳:最新の事情と今後の研究方向についての解説)という、重訳についてのパネルが開催された。この学会では、研究者たちは重訳の役割を主張する上で、ITrの概念・定義を中心に検討した(Pieta and Rosa, 2013)。さらに、Ringmar (op.cit: 4)が「文学的交流を特に歴史的に考察するには、重訳という現象抜きに

NGUYEN Thanh Tam, "Relay translation of Japanese Literature in Vietnam - Historical background and several translation Problems," *Interpreting and Translation Studies*, No.13, 2013. pages 79-95. © by the Japan Association for Interpreting and Translation Studies

は考えられない」と述べたように、翻訳史を理解するためには、直接翻訳だけではなく、歴史の長い重訳を無視してはならない。重訳のおかげで、かつてのベトナムと日本のような繋がり薄い文化・言語の間でも交流を始めることが出来たのである。

ベトナムは中国と国境を接しており、中国文化に強い影響を受け、19世紀から20世紀前半のフランスによる植民地化の時期を経て、対仏・米の戦争により独立を得て、現在は社会主義のもとで改革開放の政策を進めている。一方、中国の漢字を借用した日本語とベトナム語は漢語では語彙的意味も語感も共通する所が多く見受けられるものの、1990年代までのベトナムは、日本との交流に妨げが多く、日本の言語・文化の専門家が少なかった。こうした歴史的背景によって、ベトナムにおける日本文学は、時代ごとに、中国語、フランス語、ロシア語、英語など異なる媒介言語を用いて重訳され、政治や思想の影響で翻訳する作品に偏りが出るなど、特殊な展開を示している。従って、ベトナムにおける日本文学の重訳は、重訳という現象を究明する上で豊富なデータが得られる領域であると考えられる。

また日本では、重訳についての研究はまだそれほど多くない。それに加えて、ベトナムの翻訳事情についても知られていないであろう。そこで、本稿では、ベトナムにおける日本文学の重訳の現象を、歴史的経緯と関連づけ、時代背景が日本文学の翻訳にどのように反映されているかを解明することを目的とする。まず先行研究を踏まえて、ベトナムにおける日本文学翻訳の位置づけを論述する。次に、1945-2001年という日本文学の重訳の主な時期に絞って、その時代の歴史的背景を辿りながら、日本文学の翻訳事情を整理する。そして、実際にどのような作品の重訳がどのように行われたかについて、媒介言語の影響、及び異文化要素の翻訳方法に焦点を当てて、具体例を比較分析する。

2. ベトナムにおける日本文学の翻訳の位置づけ

本節では、ベトナムの社会・文化的背景から、ベトナムにおける日本文学の翻訳の位置づけについて述べる。

ベトナムにおける文学翻訳の歴史は、ベトナムの社会変動・文化交流の歩みと緊密な関係がある。Hoàng (1999)によると、20世紀の半ばまで、ベトナムの文学体系において翻訳文学は非常に重要な役割を演じてきた。ベトナム近現代文学が成立した1930年代に入ってから、外国文学の翻訳は、新たにロシア文学や英文学が導入され、ベトナム人読者の精神生活に重要な役割を果たしてきた。

ベトナムは紀元前から938年まで中国の諸王朝に支配された後に独立した。しかし、ベトナムの王朝は19世紀の前半まで中国文化の影響を受け入れてきた。次に、鎖国の政策を進めた最後のグエン王朝が1867年にフランス軍に敗北したことで、ベトナムは1945年までフランスの植民地になった。この時期に、長い間中国の影響のもとにあったベトナム社会は初めて西洋文明と接することになった。この大きな転換期を経験したベトナムは、「漢文」を

使うことから完全にアルファベットでベトナム語を表記する「クオックグー字」chữ Quốc ngữ²の使用に移行した。こうした状況はポリシステム理論における、翻訳文学が中心的な位置を占める 3 条件に当てはまると、見ることができよう。つまり、Even-Zohar (1978/2000:193)によると、①「若い」文学が成立途上の時、②小国の文学が他の大国の文学に圧倒されており、システム内で「弱い」地位にある時、及び③文学の危機的時点、またはポリシステムの転換期に、翻訳文学が中心的な位置になり得るということである。

その後ベトナムは南北に分断され、北部が社会主義の旧ソ連との関係が親密であり、南部がアメリカとの繋がりが強かったという状況が 1955 年～1975 年まで続いたこともあり、ベトナム文学のシステムの中で、中国語、フランス語、ロシア語、英語の文学翻訳が主流になったのは驚くにあたらないだろう。

一方、ベトナムと日本の交流は早い段階に始まる³が、安定した関係が築かれるには時間がかかった。1941 年～1945 年 8 月までの太平洋戦争中に、日本はベトナムの領土に侵攻した。また、1973 年にベトナム民主共和国(北ベトナム)政府と日本との間に正式な国交を樹立することで合意に至ったが、その後様々な誤解もあり、この関係はしばらく進展しなかった。1993 年になってようやく両国関係の正常化が進み始めた。このようにベトナムと日本の関係には阻害要因が多く存在し、幾度か中断された。結果として、日本の言語・文化の研究があまり進まなかった。

以上述べた歴史的出来事はベトナムにおける文学翻訳の事情に大きな影響を及ぼしたと見受けられる。同様に、ベトナムにおける文学システムの一つとして、日本の翻訳文学もその時代の変動に関わっている。外国文学のベトナム語への翻訳では、欧米文学と中国文学が主流であるのに対し、翻訳された日本文学はそれほど多くない。Hoàng (op.cit.:27-30)によると、1984 年～1989 年の間、ソ連文学は 300 作品、フランス文学は約 100 作品、イギリス文学は 70 作品、アメリカ文学は 60 作品が出版された。それに対して、日本文学で翻訳出版された 16 作品は、まだ「紹介されたばかりの段階」にあったという。さらに、1989 年から 1992 年の 3 年間では、アメリカ文学が 183 に増えて最多となり、フランス文学は 142 作品、イギリス文学は 114 作品、中国文学は 41 作品、そしてソ連・ロシア文学は 20 作品に激減しているが、日本文学はわずか 6 作品しかない。一方、Hà (2003:15)によれば、2000 年代以前のベトナムには、日本文学の翻訳は中国語(漢語と現代中国語を含む)、フランス語、ロシア語をはじめ、媒介言語からの重訳の作品が圧倒的に多かったという。

その主な原因としては、日本語の翻訳者が大変少なかったこともあるが、ベトナムの文学システムにおける日本文学の位置づけからも理解できるのではないと思われる。つまり、二〇世紀末までに、ベトナムの翻訳文学のシステムにおいて、日本語は周辺的な言語であり、日本文学翻訳は周辺の位置にあるため、文学の交流を重訳に頼ったのではないだ

ろうか。

さて、ベトナムで最初に訳された日本文学は政治小説の『佳人之奇遇』(東海散士著)である。1913年頃ファン・チュ・チン Phan Chu Trinh⁴によって、梁啓超の中国語訳を介して翻訳されたものである。しかし、その後、対フランス戦争や太平洋戦争で日本との文学交流が一旦止まったことから、Nguyễn (2008)は1945年を境にして、日本文学の受容の歴史を捉えている。また、2002年にベトナムは文学的及び美術的著作物の保護に関するベルヌ条約に加盟した。それがきっかけで、翻訳本の著作権に対する関心が高まり、日本文学の翻訳、特に直接翻訳の出版は著しい発展を遂げてきた。そこで本稿では、ベトナムにおける日本文学の重訳について、1945年と2001年を節目にして、考察することとする。

1945年から2001年にかけての約56年間で、ベトナムにおける日本文学の翻訳は数が増え始め、文学システムにおける位置が上がっていった。日本文学は翻訳の伝統が長い中国文学、フランス文学、英語文学、ロシア文学に比べれば数は少ないが、それらに次ぐ位置にあり、南米や北欧、アフリカ地域の文学と比べれば、かなり作品数は多くなっている。それに加えて、1980年代からベトナムの教育機関でも教材に取り上げられるまでになっている⁵。

一方、Hà (ibid.)や Nguyễn (2008)では、ベトナムにおける日本文学の翻訳出版状況について、経緯の明らかになった約60作品についての研究成果をまとめ、グエン(2013)では143作品の一覧を作成した。この一覧表によると、1945年~2001年までにベトナム語に訳された日本文学は79作品であり、全体の約半分を占めることがわかった。その中で直接翻訳はわずか6作品であり、73作品が重訳であることが見て取れる⁶。この数字から、日本文学の翻訳において重訳は中心的な位置を占め、重要な役割を演じていたということが明らかになった。換言すると、ベトナムにおける日本文学翻訳史の中でも、1945年~2001年は、重訳の歴史であったと言っても過言ではないだろう。

また、この時期に、ベトナムにおける日本文学の重訳は、用いた媒介言語や、時代ごとの政治や思想の影響により、翻訳する作品に偏りが出たことなど、特殊な展開をはっきりと示している。その偏りについては次節で1945-1974年と1975-2001年の二つの段階に分けて詳述する。

3. 1945年~2001年のベトナムにおける日本文学翻訳の歴史的背景と傾向

本節では時代に沿って、ベトナムにおける日本文学の翻訳・重訳の背景と傾向を明らかにしたい。1945年~2001年のうち、1974年までの時代はベトナムの社会・文化でイデオロギーにより北・南に分断されていたことが翻訳作品の選択に大きな影響を及ぼしたため、その年を区切りにし、より小さい2段階に分けることとする。

3.1 1945~1974年の背景と翻訳事情

a) 歴史的背景

1945年に第二次世界大戦が終わると、ベトナムはこの年にフランスの植民地統治から解放され、独立宣言を公布し、1945年9月に北部においてベトナム民主共和国が誕生した。その後、ベトナムは冷戦による東西分断の争いに巻き込まれた。1954年のジュネーブ協定の調印によって、北緯17度線を境にし、ベトナムは南北に分断された。

そのため、ベトナムの北部と南部はそれぞれ異なる政治システムによって支配され、文化・文学の発展も異なる道を辿った。この時期に、北部において、マルクスとレーニンの基本的な理論書やプロレタリア文学作品が多く翻訳された(Hoàng, loc.cit.)。同じく社会主義国の旧ソ連、中国や東欧の国々の文学が特に重視され、人気が高かった。他には、古代ギリシア文学、イギリス文学、アメリカ、フランスから南米、アジア、アフリカの文学作品も多少は翻訳された。

b) 日本文学の翻訳事情

この時期に、ベトナム語に訳された日本文学は約30作品(グエン, op.cit.:30)あり、それより前の段階よりかなり増加したと見られる。それでも、日本文学の翻訳はベトナムの北部ではソ連、中国の文学の翻訳よりかなり少なく、南部では欧米文学の翻訳数とは比べものにはならない数である(Hà, loc.cit.)。前述したように、ベトナムでは分断された背景で、それぞれの文芸全体の傾向を受けて、この時期の日本文学の研究や翻訳も南北で異なる方向で展開された。

北部では、主にロシア語、あるいは中国語を経由し、1958年に小倉豊文の『絶後の記録—亡き妻への手紙』、1961年に徳永直の『太陽のない街』、1963年に小林多喜二の『蟹工船』、1964年に宮本百合子の『播州平野』などというプロレタリア文学の代表的な作品を中心に、翻訳されてベトナム人読者に紹介された。

南部においては、サイゴン政権がアメリカの同盟国である日本と1950年代に正式な外交関係を樹立した。そのため、様々な文化交流活動が進み、日本文学の傑作(プロレタリア文学は対象外)の出版に関心が高まった。とりわけ芥川龍之介(『河童』、『羅生門』)、川端康成(『伊豆の踊り子』、『雪国』、『千羽鶴』など)と三島由紀夫(『真夏の死』、『宴のあと』など)といった作家の作品が訳され出版され、人気が高かった。特に『羅生門』と『千羽鶴』は複数の翻訳があった。また、他の日本の代表的な作家の作品集を系統的に紹介しようという計画もあった。戦争でその計画が中止されたが、夏目漱石の『心』、安部公房の『砂の女』、大江健三郎の『飼育』など出版に至った作品もあり、「ある程度、日本文学の魅力的な特色を紹介することができた」(Nguyễn, op.cit.:55)。この時期は英語、フランス語を介した翻訳がまだ主流であったが、日本語から翻訳された本が現れたのは南部の日本文学翻訳の特徴である。それは三島由紀夫の『愛の渇き』、『金閣寺』、『潮騒』、『午後の曳航』であり、Đỗ Khánh Hoan(フランス語・英語の翻訳者)と Nguyễn Tường Minh(日本語の翻訳者)のコンビによって、英訳を参考にしながら、原文から翻訳されたものである。

このように、1945-1974年の間、ベトナムでは北か南かによって、プロレタリア文学かそれ以外という特定の文学ジャンルしか訳せなかった。また、日本文学は大体ベトナムの北部

ではロシア語・中国語の翻訳、南部ではフランス語・英語の翻訳を介して、重訳されたという傾向が見出せた。ベトナムが統一された1975年まで、南北間の交流はあまりなかったようである。

3.2 1975～2001年の背景と翻訳事情

a) 歴史的背景

1975年は抗米戦争、いわゆる「ベトナム戦争」が終わり、ベトナム史の大きな転換点となった年である。ベトナムは統一され、完全な独立国となった。1975年から1988年までは、ベトナムは経済・社会・文化的な面で様々な成果を上げ、文芸においても大きな変化があった。特にドイ・モイ(1986)という維新改革以降、ベトナムは世界の国々との外交関係を広げ、文化・文芸の交流を促進した。それゆえ、文学翻訳は、量・質、思考の広さ・深さの面で大きく進展し、盛んになった。世界の古典の傑作をはじめ、社会主義の国以外の文学、また以前は「タブー」⁷とされたテーマの作品も、少しずつ翻訳され、読者に紹介された。

しかし、その後国からの援助がなくなって、出版業界は自立しなければならなくなり⁸、結果として、出版業は危機的状況に陥った。文学翻訳に対する読者の態度も変わって、それまで正統であった旧ソ連の文学に対する熱気も冷めることになったという。イギリスの探偵文学、フランスとアメリカのベストセラーなどが多く翻訳されることになった(Hoàng, loc.cit.)。そして、21世紀の初めから現在にかけて、文学翻訳は徐々に回復し、安定的な発展期に入ったといえよう。

b) 日本文学の翻訳事情

この時期には、前期に比べると、主に英・仏・露訳版を通じた日本文学の翻訳作品は数が増えたのみならず(約49作品)、日本文学は古典から現代までの作品、それに小説と詩などのジャンルでは前の時期より多岐にわたって翻訳されたと見られる。

日本古典文学の『万葉集』⁹、『平家物語』、『源氏物語』、『雨月物語』がベトナムの国営の文学出版社の企画により、複数の翻訳者(英語・フランス語翻訳者)の協力を得て、初めて読者に紹介された。日本現代文学については、前の段階で名前が知られるようになった作家の作品も引き続き翻訳された。川端康成の『古都』、『片腕』、『眠れる美女』、芥川龍之介の『藪の中』、夏目漱石の『それから』、谷崎潤一郎の『鍵』、安部公房の『他人の顔』などが挙げられる。

一方、初めて翻訳された作家では島崎藤村(『家』)、開高健(『裸の王様』)、三浦哲郎(『忍ぶ川』)や遠藤周作(『わたしが棄てた女』)などがあった。1990年代には、黒柳徹子の『窓ぎわのトットちゃん』(1989)、村上春樹の『ノルウェイの森』(1996)、『キッチン』(2000)などが英語を介して、紹介された。

要するに、ベトナムにおいて日本文学を重訳する歴史的必然性があったことは上述した理由により明らかである。特に戦争や政治問題が起きた1945年から2001年にかけて、重訳の作品は直接翻訳より圧倒的に多い(13倍)。それ故、重訳の現象抜きには、ベトナムでの日本文学の翻訳の歴史を考察できないだろう。また、ベトナムと日本の交流が非常に少ないその時期に、ベトナムでは、日本文化を紹介することは主に文学を通して、行われ

たとえられる。言い換えれば、当時の重訳された日本文学の作品は、時代的な制約を免れなかったとはいえ、ベトナム人読者に、日本という国のことを知らせる大変貴重な資料の一つだと言っていいであろう。

では、ベトナムにおける日本文学の重訳が文化を伝える役割を演じてきたとするなら、日本文化は実際の翻訳においてどのように、そしてどの程度伝えられたのであろうか。さらに、時代の影響で生じた重訳の特徴はいかに表れているのであろうか、次の節では重訳の具体例を挙げて、こうした観点について考察する。

4. 日本文学の重訳版における異文化要素の翻訳の事例

4.1 分析観点と対象

前述したように、ベトナムにおいて、日本文学の重訳が文化を伝えるうえで重要な役割を演じてきたことは歴史的な事実と認められる。この節では、異文化要素の翻訳方法を日越語間で特徴的な漢字の活用という点に着目し、文学作品の中から文化を伝えると思われる箇所を比較分析する。

異文化要素のうち、紙面の関係で、固有名詞と日本文化特有の名詞、漢字文化圏の意識を示す漢語に絞って具体例を抽出する。それらの項目が、ベトナム語への重訳と直接翻訳において、いかに訳されているのかを考察する。分析する目的は、誤訳等を指摘して批判することではなく、そこで翻訳者が用いた翻訳方法を解説すること、さらに時代に関わる日-越の翻訳の顕著な問題も視野に入れて、重訳の現状を確認することにある。

翻訳文学の作品の事例について、重訳と直接翻訳の二種類を比較するため、便宜上、日本語原作をST、直接日本語から訳したベトナム語訳をTT_V、またロシア語、英語、フランス語から重訳したベトナム語訳をIT_{RV}、IT_{EV}、IT_{FV}とする。また、日本文化がベトナム語版でどう伝わっているかを調査するものであるため、媒介言語版の底本は基本的に分析の対象には入れない。ただし、部分的に英語訳だけは参照する。

1945-2001 の間、ベトナムで紹介された日本文学のほとんどは近現代文学の作品であり、その中でも散文の小説・短編というジャンルが圧倒的に多い(グエン, loc.cit.) ため、本稿の分析対象は、現代の日本文学の散文に限定する。具体例分析の対象としては、重訳の事例では、中国語訳を介した『氷点』(三浦綾子)の Liêu Quốc Nhĩ 訳(1972)、ロシア語を介した『無影燈』(渡辺淳一)の Cao Xuân Hạo 訳(1986)、『雪国』(川端康成)のフランス語版から訳された Ngô Văn Phú & Vũ Đình Bình 訳(1995)、『山の音』(川端康成)の英語版から訳された Ngô Quý Giang 訳(1989)を中心として、分析する。直接翻訳の事例では、『金閣寺』(三島由紀夫)の Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh 訳(1971)を取り上げる。

これらの作品は日本の代表的な小説家の作品であるか、またはベトナムで有名な翻訳として知られている作品である。その他、短編集などからも一部、事例を出して分析することにする。ベトナム語訳の事例を分析する際に、原文に注意が必要な部分は下線部で示し

ている。ベトナム語の引用文には()の中に参照のために筆者による直訳も付けておく。

4.2 事例分析

この節では固有名詞、日本文化特有の名詞及び漢語という3項目でベトナム語の重訳版の訳出法をST(日本語の原文)と比較分析することにする。その際、漢字活用の有無で翻訳法を大きく2種類に分ける。前者の2項目で頻出する訳出法として、まず、日本語の音を「Tokyo」や「tatami」のように漢字を活用せずローマ字表記するケースがある。本稿では日本の名詞のローマ字表記を保持する方法を便宜上、翻訳法①とする。また、現在ベトナム語は漢字を使わず、アルファベットの表記を使用しているものの、漢字のベトナム語の音、いわゆる漢越語¹⁰は定着しており日常のベトナム語にも通じる。従って、日本語の漢字の名称は、(かつて漢字を使用した)ベトナム語の翻訳では、漢越音に置き換えることが可能である。このような日本語の漢字をベトナムの漢越語の音に適応させる方法を漢字を活用する翻訳法②とする。

a) 固有名詞の翻訳

最初に、文学作品の重訳版と直接訳版の中で、固有名詞の翻訳を考察する。具体的に、中国語、ロシア語や英語などの媒介言語を使った『氷点』、『無影灯』、『山の音』、『雪国』のベトナム語版と、原文から直接翻訳した『金閣寺』のベトナム語訳で、日本の人名、地名がどのように翻訳されたかを見ていく。

上記の5作品から、登場する人名及び地名等の表記の例を抽出し、表1にまとめる。類似の度合いを比べやすくするために、ベトナム語訳(漢越語の部分だけ)の発音をカタカナで明記する。表中の(?)印をつけた箇所は、原作における名前の発音と大きく異なるため、重訳での名称の正確さが問題となることを示す。そのずれが重訳であることから生じたのか、あるいは印刷作業中のミスによるかのいずれかであると考えられる。そして、(*)印の箇所はベトナム語の綴りではなく発音しにくいものである。

表1 固有名詞の訳出法一覧

作品名	底本の言語	翻訳年	日本語(原文)	ベトナム語訳	訳出法
『金閣寺』	日本語	1970年	溝口 東舞鶴 金閣寺	Mizoguchi ドン Đông Maizuru キン カック ツー Kim Các Tụ	→① =②(Đôngは東の漢越語)+① →②
『氷点』	中国語	1972年	辻口啓造 辻口夏枝 北原邦雄 辻口ルリ子	ライ コイ タオ Lại Khởi Tạo ハ チ Ha Chi バック ゲ ン Bắc Nguyên ベレ béLệ	=「頼(ライ)・啓(コイ)造(タオ)」→② +「口」を削除 =「夏・芝」→②+削除 =「北原」→②+削除 =(ちゃん)+名前→②+ベトナムの名称の呼び方に変更

			村井靖夫 京都	ラム ティン フ Lâm Tịnh Phu キン ド Kinh Đô	=「林」? +「靖夫」→? + ② + 削除 →②
『無影燈』	ロシア語	1986年	小橋 宇野かおる しむらのりこ 志村倫子 花城純子 石倉由蔵 ぎょうだゆうたろう 行田祐太郎 道玄坂	Kôbasi Kaôru Unô Nôrikô Simura Đzyunkô Hanadzyô* Yôsidzô* Isikura Yutarô Ghyôda* Đoghendzukaa*	→① + ベトナム語の声調
『山の音』	英語	1989年	尾形信吾 谷崎英子 幸四郎 うざえもん 羽座衛門 菊五郎 品川(駅)	Singo Ogata Aycô Tanizaki Cosinp* (?) Utzacmon* (?) Kikuguro (Ga)Siganava (?)	→①
『雪国』	フランス語	1995年	島村 駒子 東京	Shimamura Komako Tokyo	→①

表 1 から見ると、ベトナム語版での固有名詞の表記が、それぞれ媒介言語によってばらばらで一致せず、原文と色々なずれが出るという大きな問題が発生している。

中国語を介した『氷点』の訳で、固有名詞が全て漢越語で置き換えられた例では、京都が Kinh Đô、すなわちベトナム語で単なる「みやこ」を意味する言葉になった。ただし、日本人の名前は、4文字である場合は、ベトナム語訳で 1~2 文字を省略し、3文字か 2文字の漢越語になってしまうこともある。例えば辻口啓造の「口」がなく、Lại Khởi Tạo になり、北原邦雄の「邦雄」がなく、最初の 2 文字の Bắc Nguyên だけ残された。村井靖夫の「村井」は Lâm(林) + Tịnh(靖) + Phu(夫) になった。「頼」や「林」という中国的な姓になったのは確かに中国語訳から受け継ぐ問題だが、「辻口ルリ子」が一文字でのベトナムの人名の呼び方に適応される bé Lê へと訳されたのは興味深い例である。

上の例で述べたように、人名・地名を漢越語で全部、または一部を置き換え、変化させる訳法は、音の面で日本語の読み方とまったく異なる音になっただけではなく、ベトナム人にとって中国語らしい名前¹¹ になってしまった。そのため、作品の中の日本らしさが減り、原作の背景(土地と人物の名)を想像し難くしている。これでは、日本のことが徐々に分かるようになって現在のベトナム人読者に違和感を与える可能性が高いと考えられる。

また、原文から直接訳された『金閣寺』のベトナム語訳の中で、日本語の人名と地名の音はそのまま保持されているものも使っているため、現在読んでも不自然には思われない。

その効果や読者に与える印象を次の節の「漢語の訳法」で改めて詳しく検討する。

次に、ロシア語から重訳された『無影灯』では、日本の人名・地名の表記に“ô”や“d”というベトナム語の特有の声調と文字を加えるという工夫がなされた。しかし、Đzyunkô Hanadzô*、Đoghendzuka* 中の“Đzy”や“dzu”という特殊な組み合わせは一時ロシア語の学習のため、通用されていた表記である。今のベトナムでは、ロシア語がそれほど普及していないため、この表記は馴染みのない表記だと確認できる。従って、以上の例は現在ロシア語や外国語が出来ないベトナムの一般人にとって、発音し難く違和感を抱かせる箇所((*)で表示した所)である。

これに反して、英語とフランス語を介したベトナム語訳、及び日本語から直接訳されたものでは、日本の人名・地名の発音はローマ字化され、保存される傾向がある。ただし、以下のことに注意が必要である。

欧米文化の媒介言語版では、人名の場合は、名と姓の順番で、例えば尾形信吾が Singo Ogata、谷崎英子が Ayco Tanizaki、宇野かおるが Kaôru Unô のように訳される。実は、ベトナムの人名の順は姓と名前であり、日本や中国と同様である。従って、上の順番で訳されると、読者は日本人の姓と名前を逆に理解してしまう可能性がある。

また、同様に英語版からの重訳である『山の音』のベトナム語訳だが、人名・地名の訳し方にずれも見られた(Ayco Tanizaki, Siganya)。これも時代の限界が反映されたものと判断されるだろう。

以上、様々な媒介言語から間接的に訳されたものと直接日本語原文から訳された固有名詞を見てきたが、文学著作において、人名と地名という固有名詞は内容の面であり影響を与えるものではないものの、作品世界または作品のストーリーで描写される社会背景や雰囲気想像するには大きな影響力があると考えられる。例えば『氷点』のベトナム語訳の場合のように、登場人物と地名が全部漢語の音で置き換えられ、日本の雰囲気があまり残らないと、読み手がそれを中国の文学作品だと誤解する可能性がまったくないとは言えないだろう。

これまで見てきたように、媒介言語の違いによって、最終のベトナム語訳で日本の固有名詞の統一的印象が生まれにくいという状態が明らかとなった。このため、異なる媒介言語から訳された重訳で日本文学を觀賞する際に、読者は混乱するかもしれない。

b) 日本の文化的概念を表す普通名詞の翻訳

日本文化を表現する語彙としては固有名詞だけではなく、日本語の普通名詞にも言及しなければならない。コタツ、畳や障子のような日本人の生活で一般的な家具、着物や浴衣などは、外国人にとって日本文化固有の名詞として受け入れられるに違いない。

文化的概念を表す名詞の翻訳については、まず①の方法である。これは日本語の音そのまま翻訳に導入する方法であり、それには多くの例を挙げることができる。

例えば、上述したように『氷点』の中国語を媒介したベトナム語訳では、地名と登場する人物の名前は漢越語の音で訳され完全に置き換えられた。日本の小説であると気づく手がかりとしたのは2箇所しか残っていない。一つ目は、訳書のカバーに「AYAKO MIURA」

という著者名を表示することである。二つ目は夏枝という人物の服を描いた段落で 2 箇所に出た “kimono” という言葉であった。ここでは、中国あるいはベトナムの服装の名を使わず、ベトナム語で日本の文化として受け入れられている “kimono” 「着物」という言葉をそのまま用いている。また、日本の料理名の「さしみ」、「すし」や日本の精神的な事物の「いけばな」は『無影燈』のロシア語訳を経由したベトナム語訳の “Đèn không hắt bóng” の中では、“sasimi”, “ikebana” として保持されている。つまり、世界中に知られ、普及している日本の事物の場合には必ずこの音を模倣し、繰り返す訳法が徹底されていると考えられる。

一方、それほど知られていない事物はどのように訳されるのだろうか。『山の音』の「島の夢」(二)という節では、能の仮面を描写する文章がある。

《例 1》ST: 「これが、慈童、こちらが喝食と言うんだそうだ。両方とも子供だ。…前髪が描いてあるだろう、銀杏型の。元服前の少年のわけだよ。」(『山の音』 pp.203)

IT_{REV}: “- Đây là một chiếc “Djido”, còn đây là chiếc “Casiki”. Cả hai đều là mặt nạ trẻ con...

Hình chiếc lá cây gbinco, anh có thấy không? –Nghĩa là để diễn tả một cậu bé chưa đến tuổi thành niên.” (Tiếng rên của núi, p.38) (直訳:これが、慈童、こちらが喝食と言う。両方とも子供だ。…gbinco*の葉の形だと見える? というのは未成年の男を描いた。)

ベトナム語の重訳では、能の面の「慈童」(ローマ字 = Jidou) は “Djido” になり、喝食(ローマ字 = Kasshiki) は “Casiki” になった。確かに訳者は原文(この場合は媒介言語の英語版)の音を模倣してベトナム語の表記にした。それもベトナム人にとって、発音しにくい上に、原語の漢字の名前が持つ連想がなくなってしまう表記法である。この場合は、もしベトナムの漢越語の音素を用いて訳したらより効果が出ると期待できるだろう。これについては、具体的に次の節で論述する。また、銀杏(ローマ字 = ichou)はベトナム語版で “gbinco” (これもベトナム語の綴りで発音できない言葉である) になった。この植物は中国の漢方薬として、漢越語音で “ngân hạnh” ガン・ハインという通称でよく知られている。おそらくベトナム語の翻訳者も媒介言語に訳出された植物名を十分に理解できず、わざわざ “gbinco” という音を使用したと思われる。その結果、読者がその植物のイメージを想像する妨げになる可能性が高くなった。しかし、場合によって、どれが文化的事物でそのまま音を訳すべきか、またそうでないかを見分けるのは簡単な作業ではない。

次に、それほど知られていない事物は敢えて原文の音を使用せずに、特定の文化に依存しない事物で置き換えて翻訳する方法も多く見られる。

《例 2》ST: 私は下駄をつっかけて駈け出した。月のよい夜で、刈田のそこかしこに稲架が鮮明な影を落としていた。(『金閣寺』p.20)

TT_V: Tôi vội vã xỏ chân vào đôi dép và bắt đầu chạy. Đó là một đêm trăng sáng nên thơ, và đó đây những cánh đồng vừa gặt, những cọng gĩa in bóng lờ lờ trên mặt đất. (Kim Các Tự, p.10) (直訳:私はスリッパを履いて、走り出した。それは月の明るい夜で、収穫し終わっ

た畑には、稲架が鮮明な影を落としていた。)

原文の「下駄」はベトナムでの一般的な履物を指す普通名詞「*dép* (=スリッパ)」に換えられた。上で見たように、日本文化に特有のものである「下駄」に相当するベトナム語の単語がないため、普通名詞に置き換えるというのが便利で分かりやすい訳し方であろう。他の例もある。

《例 3》ST: [枕もとの雑誌を拾ったが、]むし暑いので起き出して、雨戸を一枚あけた。そこにしゃがんだ。(『山の音』p.159)

ITr_{EV}: Trời nóng và ngột ngạt đến không thể chịu nổi. Singo dậy và mở một cánh cửa sổ ở hang hiên. Thế rồi ông quỳ xuống cạnh đó. (Tiếng rên của núi, p.6) (直訳: むし暑くてたまらない。信吾は置きだして、廊下の窓を一枚開けた。そこにしゃがんだ。)

以上の例で「雨戸」は「廊下の窓」と解釈された。元の意味からは外れてしまったが、ベトナム人読者にとって想像しやすい訳語である。

直接翻訳の場合は、訳者はより主体的に適切な訳出法を選び、運用することができると考えられる。例えば『金閣寺』の「^{けんべい}憲兵」(p.19)は、英訳(TT_E)の The Temple of the Golden Pavilion では“the kempei”(p.15)とベトナム語訳(TT_V)の Kim Các Tự においては、“cảnh binh”(p.10)(漢越語=「警・兵」)と訳されている。

明らかにベトナム語訳では、相当する漢越語での概念を一般化する訳法が使用されている。もし英語訳のように、“kempei”とローマ字表記でそのまま保持すれば、読者に不必要な負担をかけるだろう。ここでベトナム語訳において、意味が少しづれるが TL の読者にとって馴染みがある名詞で置き換えるという訳法が用いられる。要するに、内容の面で重要度の低い語彙は、TL の文化に既に存在している概念や語彙で置き換えることが有効な訳法だとみなせよう。しかしながら、第 3 言語を介する重訳の場合は、その判断をするのは、より複雑で困難になるだろう。

また、日本独自の事物を指す名詞の翻訳の方法には、事物を説明する注を加えて訳す方法も多用される。特に、この日本文化に特有の事物の名前をそのまま伝える傾向は英語やフランス語を介した翻訳、及び近年の日本語からの直接翻訳で多く見られるが、理解に支障がある場合には、注が添えられる。

また、『雪国』のフランス語からの重訳である Ngô Văn Phú & Vũ Đình Bình 訳(1995: 120)では、表 1 で見たとおりに、人名と地名の表記がかなり日本の原文の発音(ローマ字の読み方)に近いが、「芸者」という言葉の訳に対して以下の脚注がある。

ITr_{FV}: “Geisha: Người đàn bà làm nghề dạy nhạc, múa, nghệ thuật tiếp tân cho các cô

gái Nhật.”(直訳:芸者:日本の女性に音楽、舞や接客術を教えることを仕事にする女)。

この注の説明は、「芸者」という概念について明らかに誤解している。この「芸者/geisha」の解説は、ロシア語訳を媒介し出版された『Đóm lửa lạc loài -Truyện tình Nhật Bản』(1988: 13)という川端康成及び三浦哲郎の短編の翻訳集での、「geyssha」の解説と同じである。つまり、『雪国』のベトナム語版の翻訳者は、おそらく『Đóm lửa lạc loài -Truyện tình Nhật Bản』の解説を参考にしたと考えられる。このような重訳の例では、誤った注が他の翻訳作品で採用されないとは限らず、日本文化の概念が間違っただけで伝えられる恐れがある。

c) 漢語の翻訳の考察

これまで、日越翻訳における文化に関わる固有名詞と特有の事物を指す名詞(語のレベル)の訳法を扱ってきた。その中で、漢語の使用がベトナム語の重訳でも頻繁に現れることが見受けられた。これはなぜかという点、ベトナム語の語彙において、漢語要素は優位な部分を占めているからである。2節で述べたように、紀元前1世紀から、漢字は社会諸制度や宗教的な思考と共に、文化的「同化」政策として、ベトナム社会に導入された。しかし、ベトナム語は中国語とは異なる系統に属しているため、漢字を用いる際に、ベトナム語の音で発音するという「越音読法」を使わなければならなかった。これはベトナム漢語、いわゆる「漢越語」の誕生に繋がっている。

また、現代のベトナム語の語彙の約7割は漢越語であり、その中の大部分は漢字表記が可能であるという。こうして、日本語とベトナム語は文字が共通していないにもかかわらず、漢語が多い点は共通の特徴であると言えよう。漢語があるからこそ、欧米言語より、日本語とベトナム語の間には、漢字の言葉の意味と語感が共通する箇所が多く判断することが出来るだろう。そこで、この節では、ベトナム語訳における日本の漢語に注目し、考察する。

これまで取り上げた事例の中で、中国語版から訳された『氷点』、ロシア語版からの重訳である『無影燈』でも『金閣寺』の直接訳でも漢越語の活用も見受けられる。例えば、日本の小説のタイトルの『氷点』、『無影燈』、『金閣寺』は対応する漢越語に順番に移され、“^氷^点Băng điểm”, “^無^影^燈Vô ảnh đăng”, “^金^閣^寺Kim Các Tự”になる。この漢越語の多用は、当時のベトナム(1990年代以前)の傾向、すなわち時代の影響ではないかとも思われる。

その上、漢越語を使うと、荘重な色調(ニュアンス)、優雅な色調、威圧的/抽象的な色調、古風な色調という婉曲語法の効果が出ると言われる¹²。この漢語を用いる訳出法の効果は他の例でも見られる。川端康成の『水月』の場合である。『水月』という言葉は、辞書では字面どおりに「水と月」または「水面に映る月影」(大辞林)などの意味が表示されている。*The Izu Dancer and Others* という短編集の英語版では、“The Moon on the Water”で訳されたが、ベトナム語版では“^水^月Thủy nguyệt”¹³のまま再現された。この翻訳法は、小説全体の文脈と漢字圏の国の文学によく使われる修辞技法を考慮すれば、STの多義性を維持することが出来たと言える。

要するに、東洋的な文彩を保とうとする翻訳者の意識を読者が理解するためには、漢越

語を使うことが有意義であると考え。ただし、中国語から翻訳する時には十分に発揮できるこの操作は、ヨーロッパ言語の英語やロシア語などを媒介した訳では若干運用しがたいと思われる。その場合は、日本(東洋)の色彩を再現するために、翻訳者の独自の工夫が必要である。

その一方、漢語の要素を用いなかったために、分かり難くなった訳の例もある。既に《例1》で挙げた『山の音』における、お能の面の名称という例では、「慈童」(jidou)を“Tù Đông” (Đông は「子ども」という意味の漢越語)と訳し、「喝食」(kasshiki)を“Hát Thực” (“thực”は「食べる」という意味が通じられる)に訳したら、必ずしも言葉の意味を正確的に判断することが簡単になるとは言えないものの、能という劇芸術の伝統的な古さを読者に伝えることになるだろう。

また、『金閣寺』のベトナム語タイトルは漢越語の“Kim Các Tự = 金閣寺” (1971年の訳)と訳されたおかげで、ベトナム読者の頭には中国的なイメージが浮かぶだろう。なぜなら、ベトナムでは中国から伝えられた大乘仏教を信仰する人々が大半を占めているからである。それに対して、英語版を媒介したベトナム語訳は“Ngôi Đền Vàng ゴイ・デン・バン (=「黄金で造れたお寺」を意味する)” (1990年の訳)である。なぜなら英訳のタイトルは The Temple of the Golden Pavilion、そして文中の「金閣寺」は The Golden Temple (The Temple of the Golden Pavilion, p.3)を用いているからである。この『Ngôi Đền Vàng』のタイトルでは、ベトナム人読者は、タイやビルマなど東南アジア諸国の上座(小乗)仏教風の黄金で造られたお寺を想像してしまうおそれがある。

以上の例から、日本小説のベトナム語訳において、音をそのまま伝えることより、漢越語の音で訳せば読者は連想しやすくなる場合もある。それ故、漢語という東洋文化の特色を転移する作業は、ある程度、満足のいく結果につながると言えるだろう。

5. おわりに

以上、重訳の現象について、ベトナムにおける日本現代文学翻訳の歴史的経緯を踏まえて、検討した。1945-2001年という時期の、歴史的背景と日本文学の翻訳事情の緊密な関係については、ベトナムにおける日本文学翻訳の位置づけと出版の実体がベトナム・日本の政治・経済・文化的関係によって変化していることが確認された。その際、用いられた重訳の言語が中国語、ロシア語、英語訳、フランス語など多様多種であり、訳される文学の種類・ジャンルも時代と共に変化していくことも関連づけられた。

また、本稿は様々な歴史的背景の下で、日本の特殊な文化要素がベトナム語訳でどのように翻訳されているかについて、例を述べ、媒介言語の影響を考慮し、考察した。分析の際に、日本語の文学作品の翻訳が難しい項目をいくつか取り上げた。具体的に、日本の固有名詞と日本の伝統的な衣食住を指す名詞、及び漢語について検討した。これまで見てきた重訳の例では、原文の中に書かれている日本文化に関する要素が不正確になったり、あるいは消えてしまう例も見られた。特に固有名詞、日本文化特有の名詞の翻訳において、媒介言語の重訳によって違った表記になるという問題は、現在の時点では日本のこ

とを知っている読者に違和感を持たせる可能性が高いと言えよう。また、漢語を翻訳する場合は、日本語と共通点のある漢越語を利用することで、「東洋らしさ」を増やしていくことができる事例も見てきた。

本稿から明確になったように、ベトナムにおいて、既に重訳された日本文学の作品は時代による制限や誤りが残っているにもかかわらず、かなり量が多く、またある程度日本文化を伝える効果が認められる。重訳は歴史的に重要な役割を果たしてきたが、グローバル化の時代という現在も、重訳はまだ存在している。世界の文化・文学を伝える上での存在理由、そして今後どのように展開・変化していくかは、引き続き研究していく価値があるだろう。

また、具体的な日本文学重訳の問題点を発見し、また用いられた訳出法の理由などを慎重に検討することで、日本の文学作品の重訳を改善する方法を見出して、提案していくことも重訳研究の一つの応用的課題となるだろう。

.....

【著者紹介】

NGUYEN Thanh Tam (グエン・タン・タム) 神戸大学大学院国際文化学研究科博士後期課程在学中。ベトナム国家大学ホーチミン市人文社会科学大学日本学科専任講師。ベトナムにおける日本文学の翻訳と受容に関する研究に取り組んでいる。

.....

【註】

1. 学会の HP: <http://www.fb06.uni-mainz.de/est/index.php>
2. 1651 年フランス人宣教師 Alexandre de Rhodes によって作られたラテン文字を使用するベトナム語の表記である。
3. 8 世紀ごろ～16 世紀の間、両国の朱印船による貿易交流が一時的に盛んになったとの記録があるが、徳川幕府の鎖国令により突然の終了となった。
4. 漢文の素養に優れた知識人・民族家である(漢字: 潘周楨、1872-1926)。
5. ベトナム全国で使用される高校 3 年の文学の教科書(2003 年版)では、川端康成についての解説と『水月』という短編が引用されている。ハノイの外国語大学やホーチミン市の人文社会大学などの日本学科では日本文学は 2～3 単位(30～45 コマに相当)を占めている。
6. 2001 年以降日本文学の直接翻訳が著しく増え、2010 年までの全翻訳作品 59 件のうち、直接翻訳は約半数を占めるまでになっている。
7. 社会主義に対する批判などの政治に関わる作品や性的表現が多く、不道徳だと思われる作品を意味する。
8. 1989 年に行われた全ベトナム出版会議で伝えられたことである。
9. ただし、万葉集の中、100 短歌だけの詩集である。

10. 漢越語とは中国の漢語の要素を借用し、ベトナム語の発音で読まれた語彙であると定義される。例:「越南」は漢越語の読み方にすれば=[viet]+[na:m](Việt Nam)
11. ベトナムで中国人の名前は漢越語で呼ぶ習慣がある。例:毛沢東はマオ・チャック・ドン Mao Trạch Đông で、魯迅はロ・タン Lỗ Tấn である。
12. ベトナム言語学研究のサイト、2007/01/09 の登載による
<http://ngonngu.net/index.php?p=203>
13. ‘Thủy nguyệt’, Yusunari Kawabata & Testuo Miura* 著 (1988)

【引用作品】

- 川端康成 (1968) 『川端康成集』 (新潮日本文学 15) 新潮社:「雪国」 pp. 7-80. 「山の音」 pp. 157-319. 「水月」 pp. 642-649.
- Kawabata, Yasunari (1968). *The Izu Dancer and Others*, trl. by Edward Seidensticker and others., Tokyo.
- Yasunari Kawabata* (1989). *Tiếng rên của núi*, Ngô Quý Giang dịch, Nxb.Thanh Niên
- Yasunari Kawabata*(1995). *Xứ tuyết*, Ngô Văn Phú & Vũ Đình Bình dịch, フランス語版の ‘Pays de Neige’ (Armel Guerne&Bunkichi Fujimon, Albin Michel, Paris 1967)より, Nxb.Hội Nhà Văn
- Yusunari Kawabata & Testuo Miura*(1988). ‘Thủy nguyệt’ *Đóm lửa lạc loài-Truyện tình Nhật Bản*, Nguyễn Đức Dương dịch, Nxb.Văn nghệ Thành phố Hồ Chí Minh.
- 三島由紀夫 (2001) 『金閣寺』(三島由紀夫全集 6) 新潮社
- Mishima Yukio(1971). *Kim Các Tự*, Đỗ Khánh Hoan & Nguyễn Tường Minh dịch, Nxb.Sông Thao.
- Yukio Mishima*(1956/1997). *The Temple of the Golden Pavilion*, trl. by Ivan Morris, Charles E. Tuttle Company.
- Yukio Mishima*(1990). *Ngôi đền vàng*, Lê Lộc dịch, Nxb.Thanh Niên
- 三浦綾子 (1983) 『氷点』 朝日新聞社
- Ayako Miura* (1972). *Băng điểm*, Liêu Quốc Nhĩ dịch, Nxb. Đông Phương, Sài Gòn
- 渡辺淳一 (1995) 『無影燈 上・下』 角川文庫 (改版六十三版)
- Watanabe Dzunichiro* (1986). *Đèn không hắt bóng (Vô ảnh đăng)*, Cao Xuân Hạo dịch, Nxb. Sở Văn hóa thông tin Nghĩ Bình.
- (* : 翻訳本と同じ著作名表記とした。)

【参考文献】

- Delabastita, D. (2009). ‘Shakespeare’, in M. Baker and G. Saldanha (eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, pp. 263-267.
- Dollerup, C. (2000). ‘Relay and support translations’, in A. Chesterman at al. (eds.) *Translation in Context*, Amsterdam/Philadelphia: John Benjamins, pp. 17-26.

- Even-Zohar, I. (1978/2000). 'The Position of Translated Literature within the Literary Polysystem', in L. Venuti (ed.) *The Translation Studies Reader*, Routledge, pp. 193-194.
- Hà Văn Lưỡng (2003). *Tình hình nghiên cứu và dịch văn học Nhật Bản ở Việt Nam* (ベトナムにおける日本文学翻訳・研究現状) *Tạp chí Nghiên cứu Nhật Bản và Đông Nam Á* (日本東南アジア研究雑誌), số 4.
- Hoàng Thúy Toàn (1999). *Không phải của riêng ai – Dịch văn học & Văn học dịch* (誰も物でもない—文学を翻訳することと翻訳文学) Nxb. Văn học & Trung tâm Văn hóa Ngôn ngữ Đông Tây.
- Kittel, H. and Frank, A.P. (eds.) (1991). *Interculturality and the historical study of literary translations*. Berlin: Erich Schmidt Verlag.
- Koskinen, K. and Paloposki, O. (2010). 'Retranslation', in Gambier and van Doorslaer (ed.), *Handbook of Translation Studies*, John Benjamins Publishing, pp. 294-298.
- Nguyễn Thị Thanh Xuân (ed.) (2008). *Văn học Nhật Bản ở Việt Nam* (ベトナムにおける日本現代文学) Nxb. Đại học Quốc gia TP. Hồ Chí Minh.
- Pieta, H. and Rosa, A.A. (2013). *Indirect translation: exploratory panel on the state-of-the-art and future research avenues*.
<http://www.fb06.uni-mainz.de/est/51.php>, 2013 年 7 月 30 日閲覧
- Ringmar, M. (2007). 'Roundabouts routes: Some remarks on indirect translations', [Online]
<http://www.arts.kuleuven.be/info/bestanden-div/RINGMAR.pdf>
- St André, J. (2009). 'Relay', in M. Baker and G. Saldanha (eds.) *Routledge Encyclopedia of Translation Studies*, Routledge, pp. 230-232
- Toury, G. (1995). *Descriptive Translation Studies – and beyond*, Amsterdam/ Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- グエン, タンタム (2013) 「ベトナムにおける日本文学の翻訳についての研究」(修士論文)

